



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

年間第4主日 A年(2023年1月29日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：ゼファニヤ書 2章3節、3章12—13節

第二朗読：コリントの信徒への手紙一 1章26—31節

福音朗読：マタイによる福音書 5章1—12a節

さいわ
幸いである

山上の説教

『マタイによる福音書』の5章から7章にかけて、いわゆる「^{さんじょう}山上の説教」と呼ばれる箇所があります。5章1節と8章1節にそれぞれ「^{のぼ}山に登った」、「^お山を下りて」とありますから、場面が山の上であったことに由来します。しかし、『ルカによる福音書』の並行箇所(6章20-49節)では平地、あるいは^{さんろく}山麓での説教となっています。

聖書では山は、神がご自分を^{あらわ}顕す場所で、神聖な場所でした。『マタイによる福音書』が場面を山の上にしたのは、イエスさまの説教が神の新しい自己^{じこかいじ}開示(啓示)であるという^{りかい}理解があったからでしょう。イエスさまは説教をすることで、神さまがどういった方であるかを伝えようとなさったのです。

ところで、どうして「山上の説教」と呼ばれるようになったかということ、アウグスチヌスの著作『^{ちよさく}主の山上での説教』によります。『マタイによる福音書』のこの箇所と、並行する『ルカによる福音書』の箇所は「山上の説教」という呼び名が固定化していきました。

第一朗読は『ゼファニヤ書』からですが、冒頭にこうあります。

しゅ
主を求めよ。

主の^{さば}裁きを行い、^{おこな}苦しみに^た耐えてきた

この地のすべての人々よ

恵みの^{わざ}業を求めよ、苦しみに耐えることを求めよ。

主の^{いか}怒りの日に

あるいは、身を守られるであろう。

「主の裁きを行い、苦しみに耐えてきたこの地のすべての人々よ」はフランシスコ会訳では「地のすべての謙虚な者たちよ」となっています。新改訳改訂第3版では「主の定めを行うこの国のすべてのへりくだる者よ」となっています。新共同訳で「苦しみに耐える」と訳されているのは、「アナーヴ」は「圧迫され、貧しく苦しい」のほかに「謙虚にへりくだる」という意味でも使われるからです。フランシスコ会訳の注釈によれば、「アナーヴ」から、「アナヴィーム」という言葉がうまれたそうです。「アナヴィーム」とは単に貧しいだけではなく、神の意志に完全に寄り頼む人々のことを指します。「貧しい人々」と「敬虔な人々」、「謙虚な人々」とは互いに関連するものだったようです。そして、救い主はこういった貧しく、敬虔で謙虚な人々に遣わされるという理解が生まれていきました。

人々

今日の福音朗読では「心の貧しい人々」「悲しむ人々」、「柔和な人々」と、「人々」という表現が続きます。

いったい、この「人々」とは誰のことを指すのでしょうか。10節に「義のために迫害される人々」とありますから、迫害のただ中であって苦しめられている人々のことを具体的に指すのでしょうか。

ですから、イエスさまのお説教の背後には、思想信条のおかげで批判され、いじめられ、苦しめられている人々がいたという事実があると思います。

「貧しい人々」(3節)、「柔和な人々」(5節)はどちらも同じヘブライ語に由来するそうです。もともとは背を曲げるという意味がありました。背を曲げるほどに貧しい人々の意味であり、神さまの前で背を曲げて救いを乞い願う人々の意味でもあるのです。4節の「悲しむ人々」とは、迫害やいじめの最中に死んでいった友人の死を悼む人々ではないでしょうか。そして5節の「柔和な人々」とは、迫害の中で苦しみながらもあきらめてしまうのではなく、しなやかに神さまに向かって背を曲げる人々ではないでしょうか。ところが折れずに、神さまを頼りとする人々です。そのように神さまの義を待ち望む(6節)人々は「幸い」なのです。

7-10節では、同じ迫害の中にあっても積極的に生きる人々を表しています。7節の「憐れみ深い」とは、迫害する人をゆるす人々です。8節の「心の清い」とは、迫害する人を憎まない人たちです。「平和を作る」(9節)とは、迫害する人と和解する人々です。こういった人々は迫害に遭っていても、「さいわい」なのです。憐れみを受け、神さまを見て、神の子と呼ばれ、そして「天の国」をいただくからです。